

子どものため… よかれと思って…



少し前になりますが、たまたま知り合った人が自信の幼少期に親の期待に応えようとして頑張ってきたことを涙ながらに話してくれました。犯罪心理学者の出口 保行さんは職務上、罪を犯した少年の保護者との面談の中で、「一生懸命子育てをしてきたのにどうして？」と戸惑っている方も少なくないと感じているそうです。出口さんは、親が思っている子どもの気持ち（客観的事実）

と子どもの実際の気持ち（主観的事実）との間にギャップがあると考え、子どもがどう受け止めているのかを意識することが大切だと言います。（学校では“親”を“教師”と置き換えて考えます）出口さんは、私たち大人がついつい使ってしまいやすい言葉として次の6つを挙げて見えます。①みんなと仲良く ②早くしなさい ③頑張る ④何度言ったら分かるの ⑤勉強しなさい ⑥気をつけて の6つです。今回は④⑤について簡単に書くことにします。“何度言ったら分かるの”は親が期待する姿に達していないときのあせりと怒りの表現です。その根底の怒りはそのまま子どもに伝わり、“あなたはダメな子ね”と受け取ってしまいます。“勉強しなさい”は繰り返し言われると余計にやる気をなくしてしまいます。これを心理学でブーメラン効果と呼びます。親が一生懸命になればなるほどよくこれらの言葉を多く使ってしまいます。（私自身、我が子に⑤⑥を多く使っていました。）子どものことを思っているからこそ出てしまいやすい言葉なので何とも難しいところです。でも、子どもはどの子も、“親の期待に応えたい”“親に認めてもらいたい”という気持ちでいっぱいです。最近では「いい子を演じること」に疲れてしまう子どもが増えてきているように思います。先日、学校だよりでランドセルの色のことについて述べましたが大人は親も教師も「自分はどうだろうか」「子どものために…を押し付けていないか」を振り返る機会があってもいいのかもしれないと思いました。

ちょっとした仕草で…

ある日、私は出勤するため車を車庫から出そうとした瞬間、私の車の前をある小学校の4年生くらいの子がいたので、先に横断をさせました。するとその子は渡り終わった時にこちらを振り返り、深く礼をして立ち去っていきました。小学生の子どもがこの態度に単純ですが気持ちよくその日のスタートをきることができました。学校に着いてから、その学校の校長に電話をし、そのことを伝え、全体にも紹介してあげてほしいと伝えました。

数日したある日、本校職員が出張から学校に戻ってくる時に、南が丘小学校の児童数名が止まってくれた車に頭を下げているのを見かけたと聞きました。私は、その事実を各学級で伝えることによって他の児童にも広がってほしいと思います。小学校門前の横断歩道でもたくさんの車が横断に合わせて止まってくれています。止まってくれた人にもいい気持ちになってほしい…と願っています。学校教育は事後の指導をするだけでなく、今回のように誰かのいい行動を広め、褒めることによって大切なことを感じ、身につけていけるようにしていきたいと思います。